

久留米大学文学部紀要  
国際文化学科編第27号 (2010)

## 「海河流屍事件」と日本詩人矢原礼三郎

与小田 隆 一

### Reizaburou YAHARA, A Japanese Poet and His Poetry Describing Unidentified Floating Bodies on Haihe River

Ryuichi YOKOTA

【要約】 中国大陸に生まれ育ち、ほぼ生涯を通して中国大陸を活動の場とした日本詩人矢原礼三郎は、1936年初頭から日本の軍事的圧力により危機的状况に陥った北平に居住した。北平居住中に隣接する天津で発生した「海河流屍事件」は、日本と中国という、いわば二つの祖国を持つ矢原にとっては、大きな転機となる出来事であった。本論では、「海河流屍事件」を題材とした詩「河抄」や、同時期に書かれた詩、随筆、更には矢原と中国詩人との接点、交流の状況などから、この事件が矢原にとって如何なる意味を持つものだったのかを探る。

【キーワード】 海河流屍事件、矢原礼三郎、民族意識、国防詩歌、邵冠祥、臧克家

#### はじめに

中国大陸に生まれ育ち、その生涯の殆どを現地で過ごした日本詩人矢原礼三郎<sup>(1)</sup>は、「外地」を含めた広義の日本詩壇と、中国現代詩壇の接点ともいべき位置にあった人物であり、いわば日本と中国という二つの祖国を持つ人物でもあった。

「内地」では、詩人としては無名に近い存在であったものの、中国大陸を舞台に数多くの詩を創作する一方、中国現代詩の日本語訳、中国映画の「内地」への紹介、中国語による詩作、更には中国詩人との交流など、当時一触即発の緊張状態にあった日中両国の接点で精力的活動を行った人物でもあった。

生まれ故郷の旅順及び「満洲国」の首都新京（現長春）を主な活動の舞台とした矢原であるが、1936年から約二年間北平（北京）に在住したことがあった。北平に来てまもなく矢原が遭遇したのが、北平に隣接する大都市天津で発生した「海河流屍事件」である。この事件は、矢原に大きな衝撃を与えたようで、事件発生からまもない時期に、それをテーマとした「河抄」という詩を発表している。

本論では、いわば日本と中国の狭間に立っていた矢原にとって、この事件が如何なる意味を持ったのか、事件後の矢原の活動や中国詩人との交流などを手がかりに探っていくこととしたい。

#### 1. 「海河流屍事件」の経緯とその背景

「海河流屍事件」とは、1936年3月から5月と、ちょうど一年後の37年3月から5月の二度に渉り、天津市内を貫流する白河（一名海河、現在はこちらの名称の方が一般的である）に連日多数の死体が漂着した事件である。

当時の天津は、周辺地域が事実上日本の勢力圏に入っていたうえ<sup>(2)</sup>、市内に駐留する日本軍が36年4月に従来の2000人から一気に6000人に増強されるなど、内と外の両方から日本の軍事的脅威に直面していた。

これに対し、天津市内では、青年学生による抗日救国運動への機運が次第に高まりつつあった。

このような情勢の下で起こったのが、「海河流屍事件」だったのである。

元来、海河で漂着死体が発見されるのはさほど珍しいことではなかった。毎年河の水が溶ける春季を中心に、事故死者、自殺者、薬物中毒患者、殺人事件の被害者等、ある程度の数の死体が発見されていた。

ただ、1936年、37年の二年は、その数が従来と比較してもあまりにも多く、例えば36年の場合は、約300体あまりにも上った。それに加え、その死体の殆どが30歳から40歳ぐらいの男性で、いずれも労働者風の服装であったことも、当時の天津市民に何やら尋常ならざるものを感じさせたに違いない。

それを反映するのが、1936年4月1日の天津の有力紙「大公報」による日本軍の関与を暗に示唆する形での報道である。同紙は市民の間に流布する事件に関する五つの説を紹介しているが、その一つに次のようなものがある。

ある者が労働者を募って各種の秘密機関の建設に従事させた後、口封じのために河に遺棄して殺害し、秘密を保持しようと図ったのである。

他の四つの説は、強盗、誘拐、麻薬患者の遺棄等、いずれも当時の天津ではしばしば発生していた一般犯罪に関するものであり、この説だけが明らかに異質のものとして際立っている。前に述べた当時の天津を取り巻く情勢を考えれば、また「秘密機関の建造」、「秘密の保持」という言葉からも、この「ある者」から日本軍を連想することは容易であろう。五つの説を紹介しながらも、実質的に「大公報」は日本軍関与説を強調したともいえる。

翌5月には、天津のもう一つの有力紙「益世報」も二度に渉り、同様に日本軍の関与を示唆する形で報道を行った。また、これをきっかけに5月28日には、天津市内の学生を中心に、天津市当局に対し事件の真相解明を求めるデモも行われた。

しかし、軍事的圧力を背景に持つ日本側から抗日運動の取締を強く要求されていた天津市当局は、この時点では積極的に動くことができなかった。このことは寧ろ市民の間に流布していた日本軍関与説の信憑性を逆に高めることにもなり、主にこの年の夏から秋にかけて青年、学生を中心とした民族意識の昂揚と、抗日救国運動の激化を招くことになった。また、それは天津のみにとどまらず、北平を含めた華北一帯に広がっていった。

翌37年3月から5月にかけて再び大量の死体が発見されるに至り、天津市当局も重い腰を上げざるを得なくなり、事件に関する調査に着手した。その結果については、当時の在天津日本総領事館の記録に詳述されている。

…天津警察署ニ於テハ五月八日該屍体投棄容疑者トシテ支那人孔昭元等三、四名ヲ逮捕セルガ其ノ取調ノ結果同人等ハ日本租界内ノ「モルヒネ」密賣者又ハ其ノ雇人

ノ依頼ヲ受ケ此等「モヒ」屋ニ寄寓又ハ出入スル「モヒ」中毒患者ニシテ「モヒ」  
購賣ノ資ガナク瀕死又ハ行倒レシ者ヲ白河ニ運搬投河セルモノナルコト判明シタル  
旨當地支那新聞紙上ニ発表セラレ…<sup>(3)</sup>

上記の通り、「薬物中毒者が遺棄されたもの」というのが、天津市当局の事件に関する最終見解であった。しかし、この事件を契機に既に前年から激化していた天津及び華北一帯に於ける抗日救国運動が、この市当局の見解によって鎮静化するはずもなく、見解発表後まもない37年5月14日、「益世報」は社説を発表し、再度の真相解明を天津市当局に要求した。

しかし、同年7月7日の盧溝橋事件をきっかけにした日中戦争の勃発、更には7月29日—30日の日本軍による北平、天津攻略、占領によって、否応なしにこの事件には幕が引かれることになった。

現在の中国では、「大公報」の示唆した「日本軍による口封じのための労働者殺害」というのが定説となっており、天津近現代史、抗日運動史をテーマとする論文、書籍等は全てこれに依拠している。但し、管見の限り、いずれの論文、書籍にも「大公報」の説を裏付ける証拠資料等は示されておらず、その真相は未だ明らかではない。

ただ、この事件が当時の天津及び北平を含めた華北一帯において民族意識昂揚の契機となったものであり、また、矢原にとっても、当時の危機的状況を目に見える形で具現した、いわば象徴的事件であったことは確かであろう。

## 2. 矢原と「河抄」

矢原礼三郎は1915年、関東州旅順で製塩業「矢原商会」を営む父重吉の三男として誕生した。愛媛県越智郡波方村（現今治市波方町）の出身で、日露戦争に出征した当時から遼東半島での製塩業の展開を企図していた父は、その後旅順に移住して本格的な塩田開発に乗り出した。そして、礼三郎出生当時には、「矢原商会」を日本人、中国人合わせて百数十人の従業員を抱えるまでに成長させ、現地日本人社会における名士の一人として知られるようになっていた。<sup>(4)</sup>

このような比較的恵まれた環境に育った矢原は、旅順中学在学時から詩作を開始、1932年、矢原の旅順中学の先輩にあたる北川冬彦らを中心に文芸雑誌「麵麴」が東京で創刊されると、旅順在住の矢原もその同人として参加し、同誌を中心に、数多くの詩を発表した。

また、1936年初頭からは、約2年間北平に滞在し、北平同学会語学校で北京語を習得する傍ら、中国映画の評論にも取り組むようになった。この間、或いはその以前の時期も含めて、矢原は北平に隣接する天津にも何度か足を運んだことがあるようで、「白河沿岸」と題する二首の詩を発表している。<sup>(5)</sup>

前章で述べた「海河流屍事件」の発生は、ちょうど矢原の北平遊学中に当たる。またこの事件に象徴されるような華北地区に於ける日本の軍事的脅威の高まりと、それに対する中国側の民族意識の昂揚と抗日救国運動の激化も、矢原の北平遊学期間と重なり合う。

さらには、従来中国大陆の雄大な風景や、満州の厳しい自然を題材とした叙景詩、或い

はその中に身を置く自らの心情を綴った叙情詩が殆どだった矢原の詩風が一変し、華北の置かれた危機的情勢や、それを目の当たりにした心情が、その詩の中に表現され始めたのもこの時期である。

日本側と中国側が対峙する前線ともいべき北平への遊学と、恐らくはそれに起因するであろう詩風の変化を背景に生み出されたのが、「海河流屍事件」を題材とした「河抄」という詩である。

この詩は1936年9月1日発行の「麵麴」<sup>(6)</sup>誌上に発表されているので、実際に作られたのは同年6—7月頃、正に「海河流屍事件」を契機に抗日救国運動が激化し始めた時期に当たるとと思われる。

詩の内容は次のようなものであった。

黄色の水！  
河は豪雨と共に  
いやましに濁水にうづまく  
それに荒涼の季節と大地  
陰惨たる曇天  
河口都市は暗い殷盛さだ  
汽船は泥水を吐き  
また泥水を吞んで下り  
船内晴雨計は  
病菌の猖獗を示す  
この河の源流をさぐれば  
そこ異民族の住むところ  
奇崛の山々は聳え立ち  
うらぶれの民族は  
ひしひしと強制労働をかこった  
やがて 日暦の数字が  
支配者を焦燥させる  
没落の人々よ  
建設の主人よ  
羸弱の阿片患者は  
屠殺され激流に投ぜられた  
あの支配者の虚偽の企画の中で！  
この日  
河口都市にちった消息  
無限の悲哀をつたえて  
無限の光芒をひいて

この中には「海河流屍事件」を連想させるような表現が、随所にみられる。例えば「うらぶれの民族は ひしひしと強制労働をかこった」という部分、「羸弱の阿片患者は 屠

殺され激流に投ぜられた あの支配者の虚偽の企画の中で！」という部分などである。この二つの表現だけを取り上げれば、この詩の背後には、当時天津、或いは北平を含めた華北一帯に流布していた事件に関する風説のうちの二つ、すなわち日本軍による労働者殺害説と麻薬患者遺棄説が混在しているかのように見える。

しかし、詩の中には「支配者」という日本軍を容易に連想させる語が二箇所を用いられるとともに、それと対比させる形で中国民族を指すと見られる「うらぶれの民族」、「没落の人々」という表現も見られる。このことは、矢原が実際には日本軍による労働者殺害説に傾いていたこと窺わせる。特に「あの支配者の虚偽の企画の中で！」という表現からは、「支配者」に対する抗議の意志をも見出すことができる。ただ、「没落の人々」や「無限の悲哀」といった表現から見ると、寧ろそれよりも危機に直面した中国民族に対する同情の方がより強く表わされていると考えられる。

また、特に注目すべきなのは、中国民族を「没落の人々」と呼ぶ一方で、「建設の主人」とも呼び、「海河流屍事件」に関する「消息」についても、「無限の悲哀」という表現を用いる一方で、「無限の光芒」という表現も同時に用いていることである。すなわち、中国民族への同情を示すかのような「没落」、「悲哀」と、それとは対照的にあたかも将来への希望を表すかのような「建設」、「光芒」とがこの詩の中に共存しているのである。

このことは、この「海河流屍事件」とそれを契機とする中国での民族意識の昂揚に対する矢原の見方に、二面性が存在したことを示唆するものといえよう。

### 3. 華北における民族意識の高揚と矢原の二面性

それでは、矢原の「二面性」とは如何なるものであったのか。まず一つは、「河抄」にもみられたような危機的状况にある中国民族への深い同情である。矢原は中国大陆に生まれ育った中国語にも堪能な日本人であり、詩人としての殆どの活動を中国大陆で行った人物でもある。また、多数の中国人従業員を抱える会社経営者の息子という生い立ちからも、幼い頃から常に多数の中国人に取り囲まれて育ったということが想像できよう。このような背景を持つ一人の日本人が、中国民族に対する同情心を持つに至っても不思議ではないだろう。

更にいえば、この中国民族への同情心には、父重吉からの影響も考えられる。故郷を捨てて中国大陆に渡り、塩田開発に心血を注いだ重吉は、植民地における「支配者」として強圧的な態度で現地の人々と接するのではなく、「被支配者」である彼らに対してある程度の理解と同情心を示していたようである。そのことを窺わせるのが、「河抄」と同時期に発表された「末裔」という詩である。

冬早く来る植民地の夜明けに  
開拓の人々は民族の城壁の前に立った  
あの山のたたずまい  
植林のない山々  
あらくれの民族は埠頭にあふれ  
きびしく彼等をとるかこんだ

それら民族の壘砦を  
突き抜け 突き抜けて  
開拓の人々 われとわが身の植民地的苦闘生活に入り渡ることいくとせ  
やがて塩の田には美しい花が咲き  
初夏の海風は純白の結晶を植え付ける  
その開拓者の群そしてその一人わが父  
頽廃と破滅の漁村を捨てて  
黎明期の植民地へと――  
一切が克服する志気は  
馬賊跳梁の国境沿岸の土質調査に  
そして宿命の堤防破壊復興工事へ  
民族の背後に絶えず憐憫の焰もやししながら  
苦力にもすすめた香高い日本茶とその心  
今 血肉の不夜城に立って  
胸つく過去の半生史を父は思うや  
陰惨と敗退と零落の家系に  
一抹の光明はかがやきわたる  
けれども  
末裔の或る者は酒囊に酔を求め  
むなしい親族結婚に倦怠し  
柳暗の巷に身をくずす  
あわれ  
純心の残りの末裔たちはただ  
遠い記憶の半島で  
潮風に吹かれ貝殻を拾う  
何時か又絶望と諦観の糸つむぎながら  
昔の家系への回販を思い思い<sup>(7)</sup>

この詩には、長年の苦闘に耐え成功に至った父への尊敬の念が表現されるとともに、それと対照する形で「末裔」の一人である自分を見つめるという内省的視点が表現されている。「末裔」という題名から考えれば、後者の方により重点が置かれているともいえよう。

この詩の中で繰り返し使われる「民族」という語は、「民族の城壁」、「民族の壘砦」という表現から見て、植民地開発に乗り出した日本人を取り囲む中国民族を指すものと考えられるが、特に「民族の背後に絶えず憐憫の焰もやししながら 苦力にもすすめた香高い日本茶とその心」という二句からは、中国民族に対する父重吉の態度を窺い知ることができる。

父重吉はまた、矢原の二人の兄をそれぞれ「清市郎」、「遼次郎」と名付けている。清はすなわち「清国」の「清」であり、「遼」はすなわち「遼東半島」の「遼」である。このことから、父が中国、中国民族に対してかなり深い感情を抱いていたことが想像できる。



矢原の中国民族に対する同情心も、或いはこの父からの影響が強かったのかもしれない。

しかし、矢原は単に中国民族に対して同情心を抱いていたのみではない。一方では、「海河流屍事件」を契機とした中国側の民族意識の昂揚と抗日救国運動の激化を、中国民族の再興につながるものとして、それが自らもその一員である日本人に予先を向けたものにも関わらず、好意的かつ積極的にとらえていたのである。これが、先に述べた矢原の「二面性」のもう一つの側面であるが、それを最も詳細に表しているのが、「支那映画の精神」と題する一文である。

矢原は、まず排日映画を見て激憤する中国人観衆たちを目の当たりにした北平遊学中の経験について語り、排日映画を「哀愁の民族没落の報告に終始している」と評価し、また「この民族に綻びる詩情は、何とうら悲しいのであろう。」とも述べる。このように、日本の軍事的脅威に直面し、もはや敗北必至の状況に追い詰められた中国民族への同情心を表した上で、矢原は更に次のようにも述べている。

併しすべての敗北は弱さを意味しない。この映画館風景は、燻った再建の姿そのものだ。虚構の彷徨の中で、昂揚する彼等の民族意識。映画人に、そして観客層に。

心ある人はそれは見て取るであろう。

心ある人は雪辱の怖しさをかこつてであろう。… 映画人の潜在意識は、聴て対比的効果としての素晴らしい観客の民族意識を生むに至るであろう。その暁こそ、大衆教育の武器である映画の勝利の日であって、正に乾杯ものである。

晩近、支那映画人の日本視察旅行が、漸次多くなったこの皮肉の現象を人は何と見るべきであろうか。私に言わせるならば、これは余りにも見え透いた侮辱行為であらねばならぬ。彼等は日本に来て、その美点に浸ると言わんよりは、寧ろ欠点の世界に立ち、遠く祖国に思いを馳せては、民族意識の強化を計るばかりなのだ。この事は、支那新興詩壇の顔役が、流行の様に日本に学び来る傾向にも、当てはめる事が出来るのであろう。彼等多くの詩人たちは、日本的制約の中で、超然と浮び上っては、口笛を吹き乍ら、将来生れ出ずる力強い民族詩を胸に描いているかの如くだ。

昂揚する民族意識。これ当然の事なのだろう。但に映画に止まらず、演劇に、文学に、音楽にと、あらゆる芸術部門のそれが膨張は何を物語る？

自覚の萌芽と自然発生的救いはあつて然るべきだった。

支那映画の精神はそこから出発する！<sup>(8)</sup>

このように、この一文からは、矢原が映画、詩などを含めた「あらゆる芸術部門」における民族意識の昂揚、換言すればこれらの芸術を武器とした抗日救国運動の展開を「自覚の萌芽」として注目するとともに、それを「没落」という中国民族の現状に対する「自然発生的救い」として、また「燻った再建の姿」、すなわち中国民族の将来における「雪辱」、復興につながるものとして評価し、積極的にとらえていたことが解る。

前章で取り上げた「河抄」の中の、「没落の人々」、「無限の悲哀」と、それと相反する「建設の主人」、「無限の光芒」という表現の共存は、まさに矢原の二面性を象徴するものといえよう。前者は、言うまでもなく中国民族への同情を表すものである。そして後者

は、「没落の人々」である中国民族が同時に将来の民族復興を担う「建設の主人」であること、また「海河流屍事件」が中国民族の「無限の悲哀」と形容すべき危機的状況を象徴するのと同時に、将来の民族復興につながる民族意識の昂揚、すなわち「無限の光芒」を象徴するという、矢原の中国の現状に対する積極的な捉え方が表れたものなのである。

#### 4. 矢原の中国語詩「夜之記録」と中国国防詩人邵冠祥

前章で述べたように、矢原は中国における民族意識の昂揚と、芸術を武器とした抗日救国運動の展開を、将来における民族復興につながるものとして、積極的に評価した。それとともに、矢原は単に傍観者としてそれを見つめるのではなく、そこに自らも関与しようとした。

それを示すのが、次に引用する中国語詩「夜之記録」の存在である。

人們茫然地過絕望的日子	ただ茫然と絶望の日々を重ねる人々
現在又是黄昏的時候了	今また黄昏が訪れた
在街頭巷尾充滿了乞丐的吶喊	街は至る所乞食の呻吟に満ち溢れ
人們的生計已經迫不及待	人々の生計は最早一刻の猶予も許さない
天空有著下雪的模様	今にも雪が降り出しそうな空模様
北方的城市已經入了死之世界	北方の都市は死の世界に入り込んでしまった
聽說北方的暗雲越發深刻	北方の暗雲はいよいよ色濃くなったという
今夜我因思維民族的末路	今夜、民族の行く末を案じる私は
而徹夜不能安睡	夜通し安眠することもかなわない
我在自己的胸膛感覺著鄉愁	胸に郷愁を感じながら
靜靜地把窗戶開了起來	そっと窓を開くと
不知不覺的	いつの間にか
絕望之微笑裝飾了我的臉	絶望の微笑が私の顔を覆い尽くすのだった

(日本語は拙訳による)

この詩に「民族の行く末」という表現があるが、前章で引用した「末裔」と同様、「民族」とはすなわち中国民族を指している。ここで矢原は、中国民族の危機的状況に対する同情心から更に一步進んで、あたかも自らを中国民族に同化させ、危機意識を共有し、当事者としてその行く末を案じるかのようである。

これに関連して矢原は、北平遊学中に書いた随筆の中で、次のように述べている。

民族の没落線は北平郊外の山脈一越えの所。明日の希望を失った、これら彷徨える人々の群。純愛の支那民衆は、氷雨しぶく夜の電車の中で、凍える手に息吹きかけ、絶望の笑いをもらす。<sup>(9)</sup>

この文に描かれた危機的状況に追い詰められた北平民衆の「絶望の笑い」が、この「夜之記録」という詩の中では、「私の顔を覆い尽くす」のである。これも矢原の当事者意識



の一つの現れであろう。

その反面、この詩自体には、前章で述べたような中国の現状に対する積極的な捉え方は直接的には表現されていない。重要な意味をもつのは、この詩自体の内容ではなく、寧ろそれが掲載された背景である。

この詩は、1937年3月20日、天津で発行された詩歌雑誌「海風」第1巻第5・6合刊号に掲載された。同誌は、詩歌による抗日救国運動の展開を標榜する天津の文芸団体「海風社」<sup>(10)</sup>の編集、発行するものであり、その主宰者が青年詩人邵冠祥（1916-1937）であった。この邵冠祥とはどのような人物であったのだろうか。<sup>(11)</sup>

浙江省舟山群島に生まれた邵冠祥は、省都杭州の小中学校に学んだ後、35年秋、天津の河北省立水産専科学校に入学した。同校は、天津の各大学、専門学校の中でも、従来から特に学生による抗日運動の盛んな学校の一つであった。

同校入学直後から、当時天津で活動していた唯一の新詩結社「天津草原詩歌会」に参加、同会の会刊「詩歌月報」を始め、「益世報」、「庸報」の文芸副刊などにも、しばしば詩や評論を投稿した。また、36年2月には、中国共産党北平市委員会の指導下に成立した青年学生の抗日救国組織「中華民族解放先鋒隊」にも加入している。

中学在学中から詩作を開始していた邵は、天津における学生抗日運動の中心であった水産専科学校の校風から強い影響を受けることにより、この頃から詩歌による抗日救国運動の展開を、自らの目指すべき道として考え始めたと思われる。そして、その具体的行動として、36年4月、ちょうど「海河流屍事件」の最中の時期に、新詩結社「詩訊社」を結成し、その代表として「庸報」文芸副刊「詩訊週刊」の編集に携わった。同年9月には、36年3月の「詩歌月報」停刊後、実質的に活動停止状態にあった前述の草原詩歌会を吸収する形で、新たな新詩結社「海風詩歌小品社」を結成するとともに、詩歌による抗日救国運動の展開、すなわち「国防詩歌」運動の展開をその方針として明示した。

同社は、「詩歌小品」（37年1月から「海風」に改称）、「詩訊月報」という二種の月刊誌を編集発行した。邵冠祥はその主編を務めるとともに、矢原の「河抄」同様「海河流屍事件」をテーマとする「白河」<sup>(12)</sup>など、当時の中国が置かれた現状に対する危機感をテーマとした詩をほぼ毎号のように発表している。

同社はまた、結成とほぼ同時に、「国防詩歌」を標榜する全国規模の詩歌団体連合「中国詩歌作者協会」に発起団体の一つとして参加し、実質的にその中心的役割を担うことになる。<sup>(13)</sup> 矢原の詩が掲載された「海風」は、言わば「国防詩歌」運動の拠点ともいえるべき雑誌だったのであり、邵冠祥は運動を展開するに際しての強力なリーダーの一人だったのである。

では、邵冠祥は矢原との間に何らかの接点があったのだろうか。邵冠祥は海風詩歌小品社の主宰者であるとともに、中国共産党指導下の青年抗日救国組織「中華民族解放先鋒隊」の一員でもあった。邵自身は、共産党に正式に入党はしていなかったようである。しかし、海風詩歌小品社の活動は言わば「中華民族解放先鋒隊」の旨とする「抗日救国」運動に、「国防詩歌」運動の展開という形で参画するものであり、北平や天津の共産党地下組織の指導下、若しくは強い影響下にあったものと考えられよう。

それに対し、矢原はその経歴や作品の傾向から見ても、直接的に左翼運動に関わった形跡は全く見られない。少なくとも政治イデオロギーという側面から見れば、この二人には

全く接点はなかったと思われる。

また、邵、矢原双方ともに、その文章の中で相手に言及した例が管見の限り全くなく、直接面識があったのかも疑わしい。

このように、一見全く接点がないかのように見える二人であるが、実はこの二人には共通の友人が存在した。それは、邵冠祥とともに当時の「国防詩歌」運動の中心的人物の一人であった、青島在住の詩人臧克家（1905-2004）である。

矢原は1936年10月、雑誌「麵麴」第5巻第10号に臧克家の詩3篇の邦訳<sup>(14)</sup>を発表するとともに、その「訳者後記」の中で次のように述べている。

…次の臧克家は訳者にも個人的に親しくしているので、この人の人格面にふれながら  
楽々と自信の訳詩は成った。彼は支那新興詩壇の大御所であり、毎日とどく地方の詩  
人志望者の手紙は夥しい数に上ると言う。所謂正統派詩人としてのこの人の建設指導  
の役割は大きい。

このように、矢原は、臧克家を中国「新興詩壇」の代表的人物と見ていること、そして自身と親しい関係にあり、その人柄も熟知していることを明らかにしている。更にいえば、この「新興詩壇」とは、前章で言及したように、矢原が中国民族の復興につながるものとして積極的に評価した「あらゆる芸術部門における民族意識の昂揚」を象徴する詩歌及び詩人たちと解することができよう。それは、正に「国防詩歌」にほかならない。その代表的人物として矢原が評価する臧克家とともに、邵冠祥も「国防詩歌」運動の中心人物の一人として、その視界に入っていたものと思われる。

矢原と親交を結んでいた臧克家は、一方で邵冠祥とも親しい関係にあった。臧は、邵が主編を務める「詩歌小品」や、その前身ともいうべき「庸報」副刊「詩訊」などにしばしば詩や評論を寄せているほか、1936年3月に出版された邵の最初の詩集『風沙夜』の表紙デザインも手がけている。この二人は、「国防詩歌」運動の展開という共通の目的で結ばれた同志的关系にあったといえよう。

前述の中国語詩「夜之記録」が「海風」に掲載された詳細な経緯は、定かではないが、そこには矢原と邵の共通の友人であった臧克家が、何らかの形で関与したのではないだろうか。これが、矢原と邵との第一の接点であり、また中国民族復興への第一の具体的な関与例である。

矢原と邵との第二の接点は、矢原による邵の詩の日本語訳である。1938年1月発行の「麵麴」第7巻第1号には、「支那新詩人選集」と題して、矢原による訳詩4篇が掲載されているが、そのうち3篇が邵の詩である。<sup>(15)</sup>

雑誌の発行時期から見て、矢原が実際に翻訳を手がけたのは、1937年秋頃だと思われる。この時、北平、天津を含む華北一帯は既に陥落し、日本軍の占領下にあった。邵冠祥も同年7月、天津陥落直前の時期に日本憲兵隊によって殺害されていた。但し、邵冠祥の死が明らかになったのは、1945年の日本敗戦後だったため、矢原は当然そのことを知る由もなかった。

敢えてこの時期に邵の詩を日本国内に紹介しようとした矢原は、日本軍による占領という形で中国側の敗北が現実のものとなってもなお、それを将来における中国民族復興の

契機となるべき「敗北」ととらえていたようである。邵の非業の死を知らなかった矢原は、邵を民族復興の担い手の一人として重視していたものと考えられる。これはまた、矢原の中国民族復興への第二の関与例といっても良いであろう。

## おわりに

中国大陆で中国民族に囲まれながら育ち、中国大陆に基盤を置いて創作活動を展開した日本詩人矢原礼三郎は、日中開戦前夜の危機的状況から、盧溝橋事件に始まる全面戦争の開始、更には華北地区の陥落と日本軍による占領、すなわち中国民族の敗北に至るまでを、全てその最前線である北平で体験している。自らの生まれ育った中国と、祖国である日本が、中国側の敗北必至という状況下に直接対峙する構図の中で、矢原は、それが自らの祖国に予先を向けたものにも関わらず、「あらゆる芸術部門における民族意識の昂揚」、特に詩歌の分野においてそれが具現された「国防詩歌」運動に、そしてその担い手であった臧克家や邵冠祥という詩人たちに、将来における中国民族復興への希望を見出そうとした。結果的に、それは中国共産党の強い影響下で、「国防詩歌」運動を展開する中国詩人と、いわば非左翼詩人である矢原という、あまり他に類を見ない形での接点、交流を生み出したのである。

但し、「河抄」や「支那映画の精神」を見れば、そのためにはまず「敗北」を経験することが不可欠だと矢原は考えていたようである。一方では中国民族の復興という希望を抱きながらも、一方では目前に迫った「敗北」を現実として受け入れなければならなかった矢原の当時の心境は、非常に複雑なものであったに違いない。中国語詩「夜之記録」は、祖国日本と、第二の祖国、或いはそれ以上の存在であった中国との狭間に立って苦悩する矢原の不安感が表出されたものだったのであろう。或いは、「あらゆる芸術部門における民族意識の昂揚」への期待自体が、矢原のそのような不安感の裏返しといえるかもしれない。矢原は、中国民族の敗北を目前にした不安感、絶望感を、民族の復興という将来への希望によって、懸命に打ち消そうとしていたのではないだろうか。だとすれば、それが、第3章で述べた矢原の「二面性」の由来だということになるだろう。

いずれにしても、華北に来てまもない時期に発生した「海河流屍事件」は、矢原に自らがどのような状況の下に身を置いているのか、また日本と中国という言葉で二つの祖国を持つ自分がそれをどう受け入れるのかを考えさせる大きな契機だったのであり、この事件をテーマにし、中国民族への同情と、将来における復興への希望がふたつながらに表現された「河抄」は、それに対する矢原の答えだったといえるのではないだろうか。

## 注

- (1) 矢原礼三郎の経歴等については、拙稿「矢原礼三郎—経歴及び著作目録」（「久留米大学文学部紀要」 国際文化学科編第25号 2008年3月）参照。
- (2) この当時天津郊外の数県が、日本軍の後ろ盾で成立した冀東防共自治政府の支配化にあり、その政府機関も天津、北平間の道路交通の要衝である通州（現北京市通州区）に設置されていた。

- (3) 外務省記録「昭和11年天津総領事館警察事務状況、同警察署長報告摘録」
- (4) 矢原重吉の経歴等については、「満洲紳士縉商録」(大連 日清興信所編 昭和2年4月)及び「昭和12年度満洲紳士録」(中西利八編 東京 満蒙資料協会 昭和12年7月)による。
- (5) 「白河沿岸」と題する詩は、「麵麴」第3巻第9号(昭和9年9月)と、「満洲日日新聞」(1937年10月2日付)に掲載されているが、それぞれの内容は全く異なる。
- (6) 「麵麴」第5巻第9号(昭和11年9月)
- (7) 同上
- (8) 矢原礼三郎「支那映画の精神」「映画評論」昭和12年9月号
- (9) 矢原礼三郎「北平だより」「満洲日日新聞」1936年11月19日—20日連載
- (10) 同社は1936年9月結成時には「海風詩歌小品社」の名称を用いていたが、1937年1月、雑誌「詩歌小品」を「海風」に改称した際、社名も「海風社」に改めている。
- (11) 邵冠祥の経歴、活動状況等については、拙稿「陥落直前期の天津における海風社の活動」(「九州中国学会報」第41巻 2003年5月)参照。
- (12) 「白河」は「詩歌小品」第1巻第2期(1936年11月)に掲載された。なお、その内容等については、拙稿「矢原礼三郎と邵冠祥—『満洲国』日本詩人と中国『国防』詩人との接点」(「南腔北調論集」 山田敬三先生古稀記念論集刊行会編 2007年7月)参照。
- (13) 中国詩歌作者協会の発起団体としては、海風詩歌小品社の他に、黄沙詩歌社(北平)、呼哨詩歌社(北平)、草原詩歌会(天津)、詩歌出版社(青島)、詩歌生活社(広州)、飛沙詩社(湖州)、洪流詩社(江陰)の7団体があったが、「一九三六年度の詩歌」(「詩歌雑誌」第2号 1937年1月)によれば、これらは、いずれも1937年初頭までにその活動を停止している。そのため、実質的には海風詩歌小品社が協会運営の中心になったと考えられる。
- (14) 「民謡」、「生命の叫び」(原題「生命的叫喊」)、「元宵」の三篇。
- (15) 「車中」、「希望」、「時間」の三篇で、いずれも原詩は邵冠祥の詩集『風沙夜』(杭州現代詩草社 1936年3月)所収。なお、もう一篇の訳詩「送別」の原作者江岳浪については、詳細不詳であるが、邵冠祥主編の「詩歌小品」等にしばしば詩を発表していることから、邵と同様に「国防詩歌」を標榜した人物と思われる。